

## 保育者養成校における子育て支援活動と学生の学び

中村 勝美\*, 戸田 浩暢\*\*, 森保 尚美\*\*, 加藤 美帆\*\*  
大橋 隆広\*\*, 村上 智子\*\*, 山下 京子\*

(2018年1月15日 受理)

### Does Child Rearing Support Activity in the College to Train Nursery Teachers Help to Enhance Students Learning?

Katsumi NAKAMURA\*, Hironobu TODA\*, Naomi MORIYASU\*, Miho KATO\*,  
Takahiro OHASHI\*, Tomoko MURAKAMI\*, Kyoko YAMASHITA\*

By taking the "1.57 Shock" of 1990 as a turning point, the government started to consider measures for creating a friendly environment for childbirth and childrearing, including supports for a work-childcare balance, and formulated in December 1994 "The basic policy toward childcare support measures" (called an Angel Plan) which stipulated a basic direction and strategic policies to be enforced in the decade ahead. Consequently, nursery schools, kindergartens need to provide child rearing support in the region. This article analyzes the questionnaire survey of the students participating in the child rearing support activity and clarifies the points necessary for students to acquire child rearing support.

**Keywords:** Child rearing support activity 子育て支援活動, nursery teachers training 保育者養成, students learning 学生の学び

#### 1. はじめに

少子高齢化が社会問題として認識されるようになって、すでに30年近い年月が流れている。1990年の「1.57ショック」を契機として、政府は出生率の低下と子ども数の減少を問題視し、仕事と子育ての両立支援など子どもを産み育てやすい環境づくりに向けてさまざまな施策を講じてきた<sup>1)</sup>。

最初の具体的計画である「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」(エンゼルプラン, 1994年, 文部, 厚生, 労働, 建設4大臣合意による策定)においては、主として保育所の量的拡大や低年齢児保育, 延長保育等の充実に力点が置かれていたように、仕事と子育ての両立支援としての保育制度拡充が子育て支援の具体的内実であった。しかしながら、5年後の新エンゼルプランでは、雇用問題や母子保健・相談などより広い観点からの施策が検討されるようになった。2002年の「少子化対策プラスワン」においては、保育の充実だけでなく、子育てをする家庭の視点から、「男性を含めた働き方の見直し」「地域における次世代支援」「社会保障における次世代支援」「子どもの社会性の向上や自立の促進」という4つの柱にそって、社会全体で総合的な取り組みが進められることとなった。その後も、「次世代育成支援対策推進法」(2003年)、「少子化社会対策基本法」

---

\* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科教授

\*\* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科准教授

「子ども・子育て応援プラン」(2003年), 「子ども・子育てビジョン」(2010年) など総合的な家族政策が決定された。

少子化対策として始まった「子育て支援」は, 当初の保育制度の拡充から家庭で子育てする親の支援にその射程をひろげ, 現在では, 放課後対策, 若者の自立支援や働き方改革, 結婚・妊娠・出産・育児までの「切れ目ない支援」まで拡大している。

一方, 保育の現場から見た子育て支援とはどのようなものであろうか。

児童福祉法第48条の4において, 「保育所は, 当該保育所が主として利用される地域の住民に対してその行う保育に関し情報の提供を行い, 並びにその行う保育に支障がない限りにおいて, 乳児, 幼児等の保育に関する相談に応じ, 及び助言を行うよう努めなければならない。」また, 2項においては「保育所に勤務する保育士は, 乳児, 幼児等の保育に関する相談に応じ, 及び助言を行うために必要な知識及び技能の修得, 維持及び向上に努めなければならない。」と定められた。これにより, 保育所は在所児童の保護者だけでなく, 地域の子育て家庭への支援や相談援助を行うことになった。この児童福祉法改正に伴い, 2003年, 保育士養成カリキュラムに「家族援助論」が加えられ, 2010年には「家庭支援論」と名称変更, さらに「保育相談支援」という演習科目が新設された<sup>2)</sup>。

幼稚園, 認定こども園においても同様に, 地域における就学前の乳幼児の保育に対する相談や支援活動は必須であることから, 保育者養成段階においても保護者対応のための知識や技術を習得する必要性は高まっているといえる。しかしながら, 教職課程においても「教育相談」が必修となっているはいるものの, 教育実習や保育実習において学生が保護者に対応する機会は豊富にあるとはいえない。そのため, 2000年頃から多くの保育者養成校において, 大学の地域貢献ならびに学生の活動への参画を目的として, 地域住民を対象とした子育て支援活動が実践されている。本学科においても, 2016年より学内に子育て支援広場「バァバの子育て支援広場」を開設し, 2018年度入学生の新カリキュラムにおいて「地域子育て支援セミナー」(2単位, 選択必修)を新設することとなった。本稿の目的は, 学内の子育て支援広場にボランティアスタッフとして参加した学生を対象として, 子育て支援活動の教育効果について調査し, 保育者養成校における子育て支援広場の課題を検討することである。

## 2. 「バァバの子育て支援広場」について

### (1) 広場開設の経緯

「バァバの子育て支援広場」は, 2016年6月, 当時, 幼児教育心理学科特任教授であった鈴木道子により開設された。前年度末に兼任していた幼稚園園長の職を辞したこともあって時間的なゆとりができた鈴木は, これまで園長として携わってきた未就園児の子育て支援の経験を活かし, 地域への貢献と同時に, 学生が自由に参加できる学びの場となることを願って, 広島女学院内に子育て支援広場を立ち上げたのである。鈴木が作成した参加者募集のチラシには, 次のようにある。

『バァバの子育て支援広場』へ行ってみよう!!

未就園児の親・子さんなら, どなたでも参加できます。

2人のバァバと学生たちがお待ちしています。

子どもさんは自由に遊ばせながら, お母さん同士, お父さん同士のおしゃべりの場として,

また、2人のバァバがいますので、お子さんのことで気になること、その他のことでも、お気軽に話しかけてください。

やさしいバァバが待ってまあ～す！！

2人のバァバのうち、もう一人は本学幼児教育心理学科卒業生で、元公立保育園園長でもある内田恭子である。

こうして「バァバの子育て支援広場」は、月に一度金曜日の朝9時30分から11時まで、都合のいいときに、いつでも誰でも参加できるというゆるやかな形態で開始された。開催が金曜に決まったのは、学生が参加しやすいようにと午前中に必修授業が少ない曜日を検討したところ、たまたまそれが金曜日だったためである。駐車スペース確保のため、事前のメールによる申し込みが必要であるものの、定員制や登録制といった形式はとらず、その日の天候や子どもの体調に合わせて自由に参加できることが原則であった。

## (2) 広場の内容

子育て支援広場は、学内のヒノハラホール5階「アセンブリホール」で開催される。前方に舞台があり、カーペット敷きのホールは、椅子席で400名弱が収容できる広さがある。ここに、乳幼児向けの絵本や感覚遊具、木製の汽車とレール、ままごとコーナー、ビニロック、マットやボール、フリスビー、コーンなどがゆったりと配置されている。

参加者は受付で参加者氏名と連絡先、子どもの年齢等を記入し、タックシールの名札を受け取る。その後は親子ともホール内で自由に過ごす。10時40分ごろになると玩具をいったん片付け、バァバによる手あそび歌や絵本の読み聞かせがあり、帰りのあいさつをして終了となる。季節に応じて、親子遊びや学生による歌の出し物が企画されることもある。広場の終了後には、アセンブリホールの階下にある学生食堂で昼食をとる親子の姿も見られる。

## (3) 参加者の概要

参加者募集のチラシは広島女学院ゲーンズ幼稚園のほか、あやめ幼稚園など近隣の幼稚園・保育所、牛田公民館、早稲田公民館等に配布した。参加者数の推移を示したのが表1と表2である。初回の参加者は5組10名であったが、その後は主に口コミで参加者が広がったようである。10組以上が常時参加するようになり、2年目の2017年には、多いときで24組52名の親子が参加した。

表1 2016年度「バァバの子育て支援広場」参加者数

実施日	参加者数 (乳幼児)	参加者数 (大人)
6月29日	5	5
7月15日	14	13
9月16日	13	13
10月28日	13	13
11月25日	14	14
12月6日	12	10
合計	71	68

1回あたりの平均参加者 親子11.3組(乳幼児11.8人)

表2 2017年度「バアバの子育て支援広場」参加者数

実施日	参加者数 (乳幼児)	参加者数 (大人)
6月23日	25	22
7月21日	19	15
9月29日	28	24
10月27日	13	11
11月24日	13	10
12月8日	16	11
合計	114	93

1回あたりの平均参加者 親子15.5組(乳幼児19人)

参加乳幼児の年齢は、表3に示した通りである。初年度は1歳児が66%を占めたが、翌年は2歳児が23%から44%へと大幅に増加している。これは、毎回、参加している常連の親子が増えており、かれらが1歳分大きくなったことによると推測される。2017年度はきょうだいで参加する親子も増えており、0歳児が増加している。

表3 年齢別参加乳幼児数(人)

	2016年 人数(割合)	2017年 人数(割合)
0歳児	6(8%)	28(25%)
1歳児	47(66%)	23(20%)
2歳児	16(23%)	50(44%)
3歳児	2(3%)	12(11%)
4歳児	0(0%)	1(1%) <sup>注1)</sup>
合計	71	114

注1) 夏休み期間のため、幼稚園就園児が参加

参加する親は大半が母親である。2年間を通じて父親と子どものみで参加した例はなく、母親と父親と一緒に参加する親子が2組ほどあった。

開設当初は想定していなかったが、幼児教育心理学科の卒業生が毎回複数名参加しており、出産した同期生同士、あるいは大学教員との再会の場となっている。

#### (4) 学生の関わり

この活動に学生がボランティアスタッフとして関わることは、計画段階からの鈴木のねらいの一つであった。大学の敷地内には幼稚園があり、学生は学外での幼稚園実習に先立ち幼児の実態に触れる機会がある。しかしながら、本学に保育園は設置されておらず、保育実習以前に学生が3歳未満児と接する機会は非常に限られている。保育者養成校で開催される子育て支援事業には、主催者と参加者の両者にとってプラスとなる要素がある。すなわち、学生にとっては、乳児や3歳未満児

の発達を体験的に理解するとともに子どもの遊びに加わることで、親と一緒にいる乳幼児の様子や親子の関わりを知ること、子育て支援の実際を学ぶことなどの意義がある。他方、参加する親にとっては、学生が子どもを見てくれたり、子どもの遊び相手になることによって、一息ついたり他の母親とゆっくり話をしたりすることができる。子どもたちも慣れてくると、活気あふれる学生スタッフと遊ぶことを楽しんでいる。

学生ボランティアスタッフは全学年から募集されたが、2016年に実際に応募し活動に参加したのは金曜午前に空き時間があつた2年生が中心であつた。学生の主な役割は、会場の設営と片付け、学内の案内・駐車場係、受付、子どもへの対応である。この活動は、正規の授業科目として位置づけられていないため、学生の活動時間は授業の空き時間に限られている。そのため、2016年度は3限目が開始する10時30分頃には学生スタッフがいなくなることもあつた。

2017年度には、金曜の午前中に授業のない学年は4年生のみとなつた。学内の活動から引退し、学外実習や就職活動等に多忙な4年生から、ボランティアスタッフを募集することは難しいことが予想されたため、2017年度は卒業研究のゼミ単位で子育て支援広場に参加することとなつた。

### 3. 調査の目的と方法

#### (1) 調査の目的

2017年度に「パパの子育て支援広場」に参加した学生ボランティアスタッフを対象として、子育て支援広場の教育効果について明らかにする。

#### (2) 調査方法・対象者

質問紙調査により行う。質問は27項目を多肢選択法、1項目を自由記述とした。調査票は参加者にゼミ担当者から直接手渡し、記入後に回収する方法をとつた。参加したゼミの所属学生58名に質問紙を配布し、51名から回答を得た。回収率は87.9%であつた。51名のうち、8名の調査用紙に未記入箇所があつたため、43名分を分析対象とした。(調査期間2017年11月22日～12月8日)

#### (3) 調査票について

調査票は28項目からなり、調査対象者の学年、これまで参加した保育実習及び教育実習、パパの子育て支援広場での役割分担について(3項目)、活動への参加意欲・態度に関するもの(5項目)、活動を通して得た知識・技能(学習成果)に関するもの(7項目)、今後の学習課題に関するもの(8項目)、活動の感想や活動への要望に関するもの(5項目)に分類される。

### 4. 結果と考察

パパの子育て支援広場に参加するにあたり、学生自身がどのような意識で参加したのか、達成感を得られたか、また保育者として自分自身の今後の課題をどのようにとらえたかを、1)活動への意欲・態度、2)学習成果、3)今後の課題の3点から分析し、結果を表に示した。平均値は4段階評定の「かなりそう思う」を1点、「そう思う」を2点、「あまり思わない」を3点、「全く思わない」を4点として算出した。

#### (1) 活動への意欲・態度

1～5の項目について、活動に対する自分自身の意欲や態度を4段階で自己評価してもらつた。

表4 活動への意欲・態度

質問事項	平均値
1：必要なことを事前に考え、主体的に準備に取り組んだ。	2.05
2：同じ仕事を受け持った担当者間で話し合いをした。	1.81
3：「広場」開催中は、必要なことを考え主体的に動くことができた。	1.79
4：リーダーや教師の指示にしたがって動くことが多かった。※	2.09
5：準備や実際の活動を通じて、メンバーと協力することができた。	1.63

※反転項目のため、点数を逆転させて集計した。

この取り組みに対する参加度・達成度については、担当者間での話し合いや協力はできたとする学生が多かった。参加単位が卒論ゼミであったため、日頃から参加者が協力して何かをする機会が多く、気心が知れた仲間同士であることによると思われる。

しかし、準備や開催中の動きについては、ほとんどの学生が初めて、しかも1回限りの参加であったため、担当教員の指示に従って動くことが多かったことが推察される。

## (2) 学習成果

1～7の項目について、活動を通して身につけることができたかどうかを4段階で自己評価してもらった。

表5 学習成果

	全体	高い	低い
1：手遊びなどの保育技術を実践することができた。	2.74	2.83	2.68
2：イベントの企画や運営について知ることができた。	2.00	1.94	2.04
3：参加者との関わりを通して、保護者とのコミュニケーションの取り方を知ることができた。	2.05	2.00	2.08
4：乳幼児との関わりを通して、子どもの実態や子どもとのコミュニケーションの取り方を知ることができた。	1.86	1.78	1.92
5：子育て支援の実際について、体験的に理解することができた。	1.86	1.72	1.96
6：ベテラン保育者の姿を通して、親子への接し方を見て学ぶことができた。	1.91	1.83	1.96
7：ベテラン保育者の姿を通して、保育のスキル（手あそび、語り掛け、読み聞かせ）を学ぶことができた。	1.95	1.94	1.96

学習成果としては、全体的に「かなりそう思う」「そう思う」との回答割合が高かったが、1の「保育技術の実践」については「あまり思わない」「全く思わない」の回答が多かった。学生が中心となって広場の企画をしたり、保育のねらいや内容を設定したりする場面がなかったため、学習成果を実感できなかったと思われる。

保護者とのコミュニケーションについては、学習成果を実感した程度がやや低くなっている。保護者は顔見知りの保護者同士での会話を楽しんでいることが多く、学生と積極的にコミュニケーションをとる場面は少ない。「受付」を担当した学生は保護者と直接会話する機会があったと推測されるが、受付を担当した学生9名の平均値は2.78で、受付を担当しなかった学生34名の平均値1.85よりも学習成果の自己評価は低くなっている。実際に保護者と応接する経験をしてみて、保護者との接し方に難しさを感じた学生もいたことが示唆される。

学習成果として、「子どもの実態や子どもとのコミュニケーションの取り方を知ること」、「子育て支援の実際を体験的に理解すること」については平均値が高く、多くの学生がこの活動を通して学ぶことができたといえる。また、ベテラン保育者をモデルとして、親子との接し方や保育のスキルを学ぶことができていた。

次に、1) 活動への意欲、態度の平均点が2以下であった学生18名（活動への意欲や主体性が高い群、以下「高い」群と表記）と、平均点が2.25以上であった学生25名（活動への意欲や主体性が低い群、以下「低い」群と表記）を比較した。1をのぞいた2～7の項目で、「高い」群の方が「低い」群よりも学習成果があったと考えていることが分かったが、それほど大きな違いはなかった。

### (3) 今後の課題

この活動をきっかけとして、自分自身が保育者を目指す学生としてもっと成長したいと思ったかを尋ねたところ、「かなりそう思う」が7名（16.3%）、「そう思う」が34名（79.0%）、「そう思わない」が2名（4.7%）、「全く思わない」が0名（0.0%）であった。「かなりそう思う」「そう思う」と回答した学生41名に、1～5の項目についてどの程度今後学ぶ必要があると思ったかを4段階で評価してもらったところ、表6の結果が得られた。

表6 今後の課題

質 問 事 項	平均値
1：手遊びなどの保育技術	1.59
2：イベントの企画や運営の方法	2.10
3：保護者とのコミュニケーションの取り方	1.39
4：子どもとのコミュニケーションの取り方	1.46
5：環境構成	1.54
6：未就園児（0～3歳未満児）とのかかわり方	1.51

「2 イベントの企画や運営の方法」を除き、ほとんどの項目が今後の学習課題として、捉えられていることが分かった。とくに、保護者とのコミュニケーションのあり方について学ぶ必要性が強く意識されていた。

今後、大学内での子育て支援活動をボランティア活動から授業化する上での課題を検討するため、活動に参加した感想や要望について質問した。その結果を表7に示した。

表7 活動に対する感想・要望

質 問 事 項	平均値
1 : 広場の活動において, 学生自身が遊びや出し物を考え, 実践してみたい.	2.02
2 : 保護者がいると, 子どもと関わりづらい.	2.44
3 : 保護者と関わることは苦手である.	2.70
4 : 機会があれば, バァバの子育て支援広場にまた参加したい.	2.05
5 : 未就園児 (0 ~ 3 歳未満児) と関わることは苦手である.	3.05

学生の多くは, 保護者とのコミュニケーションの取り方を学ぶ必要性を感じているが, 保護者とのコミュニケーションに苦手意識を持っているわけではないことが分かった. また, 37名 (86.0%) の学生は, 「学生自身が遊びや出し物を実践してみたい」に対し, 「かなりそう思う」「そう思う」と考えていることが分かった.

## 5. おわりに

以上見てきたように, 学内で催される子育て支援活動への学生参加は, 学生の主体的学習意欲を引き出し, 乳幼児の発達理解や遊び支援について体験的理解を促進する可能性が示唆された. 一方, 子育て支援のためにもっとも重要な保護者とのコミュニケーションについては, 十分な学習成果が得られなかった. 「バァバの子育て支援広場」において, 学生が保護者と話をするような機会は特に設定されておらず, 学生の役割は主として子どもと関わり遊ぶことであるのもその原因の一つであると推測される.

保護者への相談支援を行うことだけが, 子育て支援ではない. たとえば, 保護者の信頼を得られるような話すときの態度や表情, 声の速さや視線などの非言語的コミュニケーションを意識して話すこと, 子どもとの遊びを展開することにより保護者に行動見本を提示することも保護者支援の技術の一つである. 保育者の子育て支援は, 必ずしも相談支援にとどまらず, 送迎時や連絡帳などの日常の保育場面を通じて行われるものである. 授業化にあたっては, 保護者との子育てのパートナーシップの構築のために必要とされる, 相談支援以外の保育者の専門性について, 活動及び授業の到達目標として学生に意識させることが重要だといえる.

## 謝辞

「バァバの子育て支援広場」においてご指導賜りました, 認定こども園流川こども園園長鈴木道子先生, ならびに内田恭子先生に感謝申し上げます. 本研究は「広島女学院大学学術研究助成」を受けて実施しました. ここに記して感謝の意を表します.

## 引用文献

- 1) 内閣府：少子化の状況及び少子化への対処施策の状況（平成29年版少子化社会対策白書 概要版（PDF版））, 2017, pp. 21-25.
- 2) 徳広圭子：保育者養成と家庭支援論・保育相談支援—2010年（平成22）年度・集中講義「保育内容特論2・家庭支援と保育相談支援」を通して—, 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要 43, 2011, pp. 131-147.